

## 日本呉音と呉方言の音韻的対応関係 主に佳韻・皆韻字の音価をめぐって

全 昌 煥

### 要 旨

日語呉音和中国呉方言之間的音韻対応關係，歷來是前輩學者研究探討的重大內容之一。至于日語呉音受中国古漢語影響的歷史時期，前人的看法較為一致，大都認為其來源可追溯到中国南北朝時代。對於在歷史上日語呉音受哪個方言區的影響最深，其主要來源是何種方言的問題上，看法不趨一致（參考注2）。

大橋勝男、沼本克明指出有必要与中国方言的研究成果連系起來進行比較研究，而且這是行之有效的方法之一<sup>1)</sup>。尽管歷經漫長的歲月，中国各區方言也發生了巨大的變化，但是各區方言中也多多少少保留了古音。所以從方言學的基礎上、探討上述論題，還是能摸索到一些規律性東西。

衆所周知、『広韻』是推定古音的重要根拠，但是它還是有一定的局限性。所以本文參照『広韻』『韻鏡』等韻書韻圖的同時，主要是從分析南北朝詩歌韻腳的角度出發，對日語呉音的佳韻字和皆韻字存在兩種讀音的問題進行探討。

キーワード……日本呉音 呉方言 佳韻 皆韻 韻腳

### 一、日本呉音と呉方言

日本呉音とは中国六朝期の言語音を源とするものが通説である。現段階で時代的面においては、概ね見解の一致が見られるようであるが、方处的面については、議論の分かれるところが見られる<sup>2)</sup>。

その方处的要因を明らかにするには、次の二点が要請されるであろう。一つは、中国の現代方言の中で、日本の呉音体系との対応が最も顕著なものはどの方言であるかを見極めた上で、祖系音たるものを設定することである。日本呉音の「究明には中国現代方言の研究とつぎ合わせていく方向が一つ有効な方法論として残されていることを考えさせられる<sup>3)</sup>」からである。もう一つは、射程範囲に入った方言音の古音、正確には南北朝期の音を正しく捉えることである。従来の呉音研究は『広韻』『韻鏡』等の中古音体系の資料に頼りすぎるきらいがあり、『切韻』以前の南北朝詩歌の韻脚分析を取り入れた研究法はあまり見られない。今の段階で南北朝

期の音価を正しく捉えるには、当時の詩歌の韻脚を分析し活用する、古くからの研究方法が最も信憑性の高いものの一つであると言わざるをえない。

中国の歴史の中で、国家という形で現れた「呉」を時代順に並べると、次の通りである。

- イ、 春秋時代（紀元前 770 紀元前 403 年）の列国の一つで長江口地方を領有していたが、紀元前 473 年越によって滅ぼされた国。
- ロ、 三国時代（220 280 年）孫権が江南（長江以南）に立てた国。
- ハ、 五代十国（292 739 年）の時代、楊行密が淮南、江東に立てた国、四世で南唐によって滅ぼされる。

上記のように歴史的に「呉」という国の支配する範囲は一様ではないが、中国の歴史のなかで、「呉」は長江流域を指すのであると理解していいと思われる。

そして、南北朝とは 317 年司馬睿が建康（現在の南京）に即位してから、589 年隋が陳を滅ぼし南北朝を統一するまでの時期である。この時期に東晋・宋・齊・梁・陳の歴朝はいずれも建康に偏安し、北魏・北齊・北周等の北朝に対して、南朝と呼ばれるようになったのである。この南朝の都である建康も歴史的にちょうど呉方言地域に入るのである。

呉方言というと、上海・蘇州・杭州・温州・紹興等の方言が含まれる。人口は、漢民族の 8.4% を占める。子音と母音等に南北朝時代の古音が未だに残存している点、又それが日本呉音との間に部分的な面において整然とした対応関係を持っている点など、大いに関心の引かれるものがある。

日本呉音と中国呉方言の間に音韻的対応関係が存することは、既に先学によって指摘されている（藤堂明保『中国音韻論』190 頁参照・張光宇「呉語在歴史的拡散運動」（『中国語文』第 243 期）参照）。日本呉音と中国の呉方言の間に、音韻的対応が存することは歴史的背景がある。中国では南北朝時代に仏教が盛んで、造寺造塔がしきりに行われ、この時期から仏教は朝鮮半島を経て来日したとされている。故に仏教の浸透と共に日本呉音が当時の呉方言の影響を受けたということは、当然のことで疑う余地もない。

日本呉音と中国呉方言の比較の際、一つ注目すべき点は、現在の呉方言は長い歴史の中で大きな変化を蒙り、ごく当然のことでありながら、古代の呉方言そのままのものでないことである。「呉語東遷」「呉語南移」「呉語西播」等により古代呉方言の音韻的特徴が今の呉方言地域以外の閩語等にも多くみられることは、中国の歴史的事情と照らし合わせて考えてみると、さほど理解し難くもないのであろう。これについては張光宇の「呉語在歴史的拡散運動」に詳しい分析と緻密な論証がある。張光宇は「日本呉音に反映されている早期の呉方言の特徴は今や南部の呉方言と閩方言に見られることが多い」と述べている。

例えば、日母の場合、今日の呉方言で /ɲ/ になるが、これは日本呉音とほぼ一致している。また韻母においても、日本呉音では、三等字の「イ」が無表記されることがあり、それに対して四等字は「イ」音を転写している傾向がある。因みに、今日の南部呉方言と閩語では未だに三

等音と四等音の対立が目立つ。

日本呉音は南北朝の呉地方の方言音に由来する蓋然性が高いと思われるが、日本呉音と呉方言を比較考察するに当たっては、歴史的要因を十分考慮し、呉方言地域の周辺地域の方言音である閩語等も見落としてはいけないということがいえる。

## 二、佳韻・皆韻字の音価

本論では前述の内容を踏まえながら、主に佳韻字と皆韻字における日本呉音と呉方言の音韻的対応関係の考察を試みたい。

呉音体系の中で佳韻と皆韻字には「ア」と「エ」の二様の母音があるが、これをいかに捉えるべきかという問題は果たして解決されたのであろうかという、そうではない。まず先行研究の主なものを眺めながら、問題点を考えてみることにする。佳韻字と皆韻字に関して、日本側の研究としては主に藤堂明保、林史典、沼本克明の研究を取り上げることとする。中国側の研究としては、主に王力の説に従い、考察を試みることを旨とする。王力は中国音韻現象を考察する際、体系的な枠組みの中での音韻変化を捉え、緻密な学説の確立が特徴的なものである。故に本論では、概ね王力の説を軸に問題点の検討を試みたい。

### 佳韻の例

解 呉音 ケ 漢音 カイ

快 呉音 クア 漢音 クウ

### 皆韻の例

芥 呉音 ケ 漢音 クワイ

懐 呉音 エ 漢音 クワイ

これについて藤堂明保は「漢語の母音 a や e 類を（いずれもふつうの a より狭い）を、呉音ではむしろ日本語の工段に近いと認めて工段に訳したが、漢音では一ようにア段に訳した（『漢語と日本語』291頁）と説いている。

ところが、藤堂明保は、また「皆佳韻系 鞋カイ|戒カイ界カイ皆カイ芥ヶ解ヶ賣マイ快クエ懐エ壊エ畫エ拜ハイ」（「呉音と漢音」）の用例に触れ、「皆佳韻が「鞋カイ」「皆カイ」となるのか、「芥ヶ」「解ヶ」となるのかは、明白ではない」としている。言い換えれば、佳韻と皆韻系の字に「ア」と「エ」の二種類主母音があるということになり、これは「呉音ではむしろ工段に近いと認めて工段に訳したが、漢音では一ようにア段に訳した」とは矛盾撞着するようになる。

この問題について、中田祝夫・林史典の『日本の漢字』（中公文庫・429頁）では、佳韻・皆韻には「主母音を呉音で -e- に写すものがあるが、漢音では一般に -a- で写す」と述べている。/e/は古層のものとして取り上げている。

又、沼本克明は佳韻・皆韻字の開口音[アイ]の場合、「中心母音がアで表記されるのを主流とするが、例外となるエ列音で表記されたもののがかなり出現する」とし、「それは原音における $\text{ə}$ のような中心母音を転写したと考えられ、六朝期の、切韻よりやや前の実態を反映するものであろう<sup>4)</sup>」とし、また合口音の場合もエ列音表記は古い形を反映しているものであろうとしている。つまり、沼本克明は日本呉音の中には、古音と方言音が含まれている重層性を重んじる立場からの見解であると取られるが、正鵠を得た明断である。

ただし、「エ」音は、当時南北朝期の方言音であった可能性も十分ありうる。したがって、先行論に対してなお考察を前に進める必要があるのではないかと考えられる。

日本呉音と漢音資料等の限界により、視野を広げない限り、問題解明は絶望に近いと言わざるを得ない。実は、問題解明の鍵は中国の呉方言にあるのではないかとと思われる。正確に表現すれば、南北朝時代の呉地方の方言音にあると言える。更に長い歴史の流れの中で遥か昔から呉方言の音韻的恩恵を蒙った周辺方言区の音韻体系に、この問題の重要な糸口が潜んでいる。前述の通り、中国の歴史的事情により、呉方言の南の方に位置する閩語(びんご)・客家語(はっかご)・奥語(えつご)も古代呉方言音の影響が残されている。それは「呉語東遷」「呉語西播」「呉語南移」によることであることは常に指摘されていることである<sup>5)</sup>。したがって、これらの言語事情をも考慮に入れる必要が生ずる。

南北朝詩人の詩歌の韻脚は、当時の呉音の音韻状態を選別する際の重要な根拠となる。韻脚から南北朝時代の音韻を考える際、詩人たちの本籍も見逃してはならない一つの大事な要因である。ただし、当時西北異民族の侵入により、北方の漢民族が江南に移り、北方の言語音が呉地方の言語音の洗礼を受けて最終的に北方の言語音が南方系に統一・融合された傾向ももう一つの重要な視点となる。

南朝（東晋・宋・齊・梁・陳）詩歌の中で佳韻と支韻が韻を踏む詩人は以下の通りである。

顔延之	宋	(384 456)	本籍：山東
鮑照	宋	(424 467)	本籍：山東
江淹	梁	(444 505)	本籍：山東
王僧孺	梁	(465 522)	本籍：河南

上記の南朝の詩人達は本籍が北方系であるが、彼等が生きた時代、または仕えた朝廷が南朝であるかそれとも北朝であるかを見分ける必要がある。東晋・宋・齊・梁・陳等南朝詩人たちの韻脚の分布は、呉地方の言語音を検討する際、何よりも最も重要な根拠となるのは紛れもない事実である。

本論では、主に日本呉音と呉方言との関係、日本呉音と南北朝音韻との関係、この二つの視点から問題解明を試みたい。

考察の手順としては、まず二の(一)と(二)では「エ」音を、三では「ア」音を取り上げることとする。

## (一) 佳韻字の音価

## (1) 佳韻字における日本呉音と呉方言の対応

ここでは、まず佳韻字系の日本呉音の例を取り上げることとする。

① 万葉仮名の佳韻字<sup>6)</sup>

畫 エ                                  賣 メ

② 仏典の佳韻字<sup>7)</sup>

買 マイ                                  崖 ガイ                                  懈 ゲ・ケ  
 佳 クエ                                  解 ゲ・ケ                                  畫 エ  
 罽 クエ

上記の通り、同じく佳韻/eai/字系の日本呉音であっても、その主母音は「ア」と「エ」の二種類がある。これについて南北朝時代泰部の字が「ア」「エ」に訳されている現象も注目されたい。沼本克明は蟹撰佳韻字の場合、開口音に主母音「ア」のほか佳(クエ・ケイ)懈(ケ)解(ゲ)の例外音があり、合口音には「マイ・クワ・クエ・クワイ」の音が現れていることを指摘している(沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』560-562頁参照)。これについては、既述の通り、現代の呉方言の音韻実態を考察する必要があり、また呉語の祖音である南北朝時代の音韻状態をも検討すべきであると考えられる。

次は、佳韻字の古代音価、日本呉音に顕現する表記と中国呉方言及び閩語の福州話等の地域における佳韻字の音価を表で簡単にまとめておくこととする。

表 1

佳韻	鞋	賣	解	畫
先秦	e	e	e	ue
南北朝	eai	eai	eai	uai
呉音	アイ	エ	エ	エ
上海	a	a	a	ua
南京	ai	ai	ai	ua
温州	a	a	a	a
福州				ua

主に王力の『漢語音韻史』とカールグレン『中国音韻学研究』による。

上記の表からも分かるように、日本呉音では同じく佳韻字でもその主母音は「ア」と「エ」の二種類あるが、「ア」の場合、呉方言の多くの音と一致している。呉方言のなかで、上海語の佳韻字に今でも主母音/a/が残っている。同じく呉方言に属する温州語と南京語も主母音/a/を

残している。現代呉方言が麻/a/韻と佳韻/a/・皆韻/a/の主母音/a/を基本的に保存していることは、既に指摘されている通りである。因みに呉方言周辺地域の閩北方言、閩南方言と客家方言更に完全な形で残されていることはすでに指摘されている<sup>8)</sup>。

上記の呉方言の調査結果と比べてみても分かるように、日本呉音の佳韻字の音/a/は、基本的に呉語と一致していることは一目瞭然である。上海語と温州語に母韻/i/が脱落しているが、全体的に考えると、体系を崩すようなものではない。

もう一方では、日本呉音の「エ」はどういうふうに考えるべきかだが、それは呉方言と閩語等にある一字両読の現象との関わりから考えるべきであろう。

例えば「街」の主母音は、上海で/ai/のほか/ /がある。「賣」も/a/のほか/e/がある。合口佳韻字の「畫」は閩方言の汕頭語では主母音が/a/以外に/ /がある。

この現象は特定の字だけに見られる個別的現象ではない。同じく佳韻字の「敗」が上海では/be/で読まれ、「邁」が/me/で読まれる。また灰韻字の「誨」を/hue/、「回」を/hue/で読むこと等からも分かるように/e/音は蟹撰字の全体に現れるのである。特に閩方言でも文語と口語の間にこのような整然とした対応関係が見られる。

## (2) 佳韻字の日本呉音と中国の古代音韻法則との関係

それでは、日本呉音の佳韻字のなかで「鞋」の主母音が「ア」音で表記されているのに対して、母音「エ」音で記録されている「賣(メ)解(ケ)と畫(エ)」等は、どのように捉えるべきか。謎に包まれているこの問題は、佳韻字の来歴を切り離して考えるのでは、その解明が難しいだろうと思われる。表(1)の佳韻字の出身を簡単にまとめると、次の通りである<sup>9)</sup>。

南北朝の/eai/音字「鞋」「解」と「賣」は、先秦の/e/音字（支部開口二等字）から来ている。

南北朝の/uai/音字「畫」は、先秦の/uek/音字（錫部合口二等字）から来ている。

その音韻変化を表に示すと、次の通りである。

表 2

佳韻字	鞋・解・賣	畫
先秦	e	uek
南北朝	eai	uai

王力の『漢語音韻史』『漢語史稿』を参考に作成

中国音韻変化の事情と関連付けて考えた場合、日本呉音の中で、佳韻字「鞋」等の主母音が「ア」に訳され、「解・畫・賣」の母音が「エ」に訳されたのは、それぞれ南北朝時代の主母音への忠実な対応が主な根拠となっていた可能性もありうる。ここでは決して「エ」音に訳され

た日本呉音が「ア」より更に古層のものであると決めつけることはできないが、そういう可能性もありうるし、同時に古代呉地方の方言音の影響によることもありうる。古い音の影響の方が強かったのではないかというのが、現段階での推定のようなのであるが、古代呉方言との関わりについての検討も必要ではないだろうか。卑見は南北朝の詩歌のところで述べることにする。

の場合であるが、現代呉方言の母音/a/が南北朝の母音/a/と対応している点、またそれが中国の閩方言からも実証されている点等から、日本呉音の「ア」は当時中国南北朝の佳韻の音を忠実に転写した可能性は十分存する。

の場合の「畫」の音が南北朝時代では主母音が/a/であると王力は推定するが、それが日本呉音では「エ」で記されている。これについては、他の原因もあり得ることをまったく否定するわけではないが、それは、まず南北朝以前の先秦時代における「畫」の主母音が/e/であったということとの繋がりが何よりも大きいものであると考えざるを得ない。

### (3) 南北朝時代の詩歌韻脚との関係

次は、中国南北朝時代の詩歌の押韻事情から、日本呉音の佳韻字が「エ」に訳された原因について考えてみたい。これは、日本呉音を中国南北朝時代の呉方言との関わりに着目する視点を出発点とするものであるが、現段階ではこれが古代呉方言音推定の最も有効な方法の一つである。

まず王僧儒（梁）の詩歌<sup>10)</sup>であるが、韻脚に現れる佳韻の韻価を考えてみることにする。

#### 詠 寵 姬

及 君 高 堂 還 値 妾 妍 粧 寵  
 曲 房 褰 錦 帳 迴 廊 步 珠 屣  
 玉 釵 時 可 掛 羅 襦 詎 難 解  
 再 顧 連 城 易 一 笑 千 金 買

表 3

韻脚	先秦音	南北朝音	韻目
寵	e	eai	佳韻
屣	ie	ie	支韻
解	e	eai	佳韻
買	e	eai	佳韻

王力の『漢語史稿』『漢語音韻史』により作成

佳韻字の「寵・解・買」と支韻字「屣」が通韻している。

佳韻の/eai/が前舌的性質を持たない限り、少なくとも近似した音韻的性質に恵まれない場合、支韻の/ie/と通韻することは極めて困難であったであろう。そして、現在の呉方言の中にまた

閩語の中にも佳韻字の中にも前舌の母音 /e/ が残されていること、また日本呉音系の万葉仮名の中で佳韻字の「賣」がエ列甲類として現れることは、示唆するところが大きい。

ここで南北朝(317 - 589年)の佳韻字を見ることとするが、必要に応じて魏晉の状況にも触れる。というのは、中国の音韻史の中で魏晉南北朝を一区切りとして取り扱うのが、通常であり、また晋の場合、西晋と東晋とは時代的に繋がるものだからである。したがって、魏晉を切り捨てて南北朝だけを取り上げることは、極めて無理なことでもある。

魏晉南北朝の佳韻字の場合、于安瀾の『漢魏六朝韻譜』(「支佳」242 - 250頁)によって調べたところ、佳韻字と支韻字が通韻するものが最も多く、絶対的優勢を保つ<sup>11)</sup>。これは佳韻字が前舌的性質の母音であった根拠として受け止められる。

魏晉から南北朝時期まで佳韻字が前舌の支韻/e/と通韻している用例が圧倒的に多いことは、佳韻字が前舌の主母音であったことにほかならない。そして古層の呉音体系である万葉仮名で支韻字「宜・義」がエ列乙類として記録されているのは、それが上古の月部/a/から由来することと最も緊密な関係をもつと考えられる。先秦の月部/a/字「宜・義」が南北朝の支韻[e]に合流する過程において、中舌的/e/が万葉仮名に反映されたものと捉えたい。

原音の「陰陽対転」規則により、陰声の泰部(泰韻・佳韻・蟹韻・卦韻)は、陽声の寒部(寒韻・刪韻・桓韻)と相対応し、同類の主母音を持つ。特に本題に関わる佳韻字と刪韻字が日本呉音に訳された用例は次の通りである<sup>12)</sup>。

佳韻字 開口二等字：佳(クエ)解(ゲ)懈(ゲ)買(マイ)崖(ガイ)

合口二等字：罍(クエ)畫(ア)

刪韻字 開口二等字：還(グエン)斑(ヘン)版(ヘン)顔(ゲン)雁(ガン)

合口二等字：関(クワン)患(クエン)

以上のように佳韻字と相対応している刪韻字も主母音に「ア」「エ」の二様が現れる。佳韻字が日本呉音の中で「ア」と「エ」で具現するのは、決して単なる偶発的現象ではなく、音韻体系全体の投影なのである。

佳韻字と刪韻字の主母音が中舌的性質を持つものであったことは、寒部が仙部(仙韻・先韻・山韻)と通韻していることから裏付けられる。そして、陽声の仙部と相対応している陰性の祭部齋韻字も万葉仮名では前舌のエ列甲類音として現れ、仏典に見られるのもその主母音が殆ど「エ」音で現れる。

佳韻字の主母音を藤堂明保は /e/ と推定している。それに対して王力は主母音を /a/ としながら、介音として /e/ を設定している。いずれも佳韻字の前舌的母音に注目していたことが分かる。だが、同じく佳韻系列であっても、南北朝時代から唐に至るまで、字ごとに /a/ への変化は不均等なものであつたらう。

佳韻字の日本呉音訳の場合、「エ」は呉方言の影響によるものであり、「ア」と「エ」の中でどちらが更に古い音であつたかについては、単に中国音韻事情から考えると「エ」の確率が高



いようであるが、これが当時建康（現在の南京）を都とする南朝の詩歌の韻脚に多く見られることから判断すれば、時的要因だけを強く主張してそれをただ古音の延長と見なすのは、結果的には方処の要因を切り捨てることになり、結論的に不合理が生じる恐れがある。

## （二）皆韻字の音価

### （1）皆韻字における日本呉音と呉方言との対応

皆韻字も佳韻字と同様主母音の中にアとエの二種類がある。これらを取り上げると、次のようである。

#### ① 万葉仮名の皆韻字<sup>13)</sup>

階 ケ                      戒 ケ  
俳 ヘ

#### ② 仏典の皆韻字<sup>14)</sup>

皆 カイ                      排 ハイ                      拜ハイ  
戒 カイ                      界 カイ                      拝ハイ  
駿 ガイ                      恠 クエ                      疥 ケ  
芥 クエ                      懐 エ                      壊 エ

この「ア」と「エ」については、佳韻字と同じく沼本克明から主母音「ア」が主流を成すが、「エ」は古音の投影であろうという指摘がある<sup>15)</sup>。

それでは、中国における皆韻字の音韻実態を見ることとする。ここでも呉方言と閩語を考察の主な対象としたい。

表 4

皆韻字	皆	界	戒	壊	排	拜
先秦	uəi	ei	əK	uəi	eəi	eat
南北朝	eəi	eəi	eəi	uəi	eəi	eəi
呉音	カイ	カイ	カイ	エ	ハイ	ハイ
上海	a	ia	ia	ai	a	ai
南京	ai	ai	ai	ai	ai	ai
温州	a	a	a	a	a	a
福州	ai	ai	ai	a		a

主に王力の『漢語音韻史』とカールグレンの『中国音韻学研究』による

上記のように呉方言と閩語では主母音/a/が多い。この表を見る限り、ただ閩語の「排」が主母音/ /を持つだけである。だが、呉方言及び閩語で同じ字に二種類の読み方があることは、前述の通りである。つまり、文読（文語）と白読（口語）により生じる現象である。これは中国の他の方言でも見られることである。

皆韻字の中で、一字両読の例を見ると、次の通りである。

例字	排	埋	怪	壞	拜
文語	/ba/	/ma/	/kua/	/fiua/	/pa/
口語	/be/	/me/	/kue/	/fiue/	/pe/

これは呉方言の上海語に見られる現象である。このように皆韻字の場合も前記の佳韻字と同じく主母音として/a/と/e/の二種類が現れる。

## （2）皆韻字の日本呉音と中国古代音韻法則との関係

先秦時代において、中古の皆韻字はその主母音/e/が中舌的なものであったか、それとも奥舌的なものであったかは、要注意である。

皆韻字の出身を概観すると、次のとおりである<sup>16)</sup>。

南北朝の「皆・界」は先秦の脂部/e/からきている。

南北朝の「戒」は先秦の職部/əɣ/からきている。

南北朝の「壞」は先秦の微部/uəi/からきている。

南北朝の「排・俳」は先秦の微部/əi/からきている。

南北朝の「拜」は先秦の月部/at/からきている。

の「皆・界」が/e/から/e/へと変化し、「戒」・「壞」・「排」は/a/から/e/へ、「拜」は/a/から/e/へと移り変わったのである。

表に示すと、次のとおりである。

表 5

皆韻	皆	界	戒	壞	排	拜
先秦	ei	ei	əɣ	uəi	eəi	at
南北朝	eəi	eəi	eəi	uei	eəi	eəi

王力『漢語音韻史』を参考に作成

皆韻字と佳韻字の音韻変化のルートを辿ると、共通点と言えるのは母音の前舌化の傾向である。

例は代表的なものだけ取り上げる。

表 6

	先秦	南北朝	隋・唐・宋
佳韻	e	eai	ai
皆韻	ei	eai	ai

王力『漢語音韻史』を参考に作成

両者はいずれも母音前舌化の方向に向かって変化するが、先秦時代における出身が異なっているがために、先秦から南北朝にかけての音韻的性格も違ってくる。敢えて南北朝の詩歌の韻脚字事情と日本字音の中に具現されている状況から判断するならば、その変化過程において、ある一定の時期に皆韻字は中舌的であって、佳韻字は前舌的だったのであろう。皆韻字と佳韻字が古層の呉音体系と言われる万葉仮名における分布は、次の通りである。

表 7

工列音	甲類（前舌的）	乙類（中舌的）	所属韻目
ケ・ゲ		階・戒	皆韻
ヘ・ベ		俳	皆韻
メ	賈		佳韻

藤堂明保『中国音韻論』を参考に作成

そして、大変興味深いところは、南北朝の詩歌の押韻事情と結びつけてみると、皆韻字と通韻する灰韻字と咍韻字は万葉仮名で共に工列乙類（中舌母音）であり、佳韻字と通韻する祭韻字と肴韻字は工列甲類（前舌的母音）である。

### （3）南北朝時代詩歌韻脚との関係

前に皆韻が中舌的母音であることは言及した。そこで一つ実例を挙げるが、陶淵明の詩歌をみたい。『帰鳥 四章』の一部分である。

翼 翼 帰 鳥	馴 林 徘徊
豈 思 天 路	欣 及 舊 棲
雖 無 昔 侶	衆 聲 每 諧
日 夕 氣 清	悠 然 其 懷

韻脚は「徊・棲・諧・懷」である。以下韻脚の音価である。

表 8

韻脚	先秦音	南北朝音	韻目
徊	uəi	uɐi	灰韻
棲	iei	iəi	齋韻
諧	ei	eɐi	皆韻
懷	uəi	uɐi	皆韻

王力の『漢語音韻史』と小川環樹の『陶淵明』による

これは皆韻が灰韻・齋韻と通韻する用例である。于安瀾の『漢魏六朝韻譜』に基づいて魏晉南北朝の押韻形式の統計を取って見ると、「皆＋灰・哈」型が最も多く約 58 例、「皆＋支」型が最も少なく 3 例しか見当たらない。それに皆韻字と中舌母音の微韻字との通韻例が約 10 例ぐらいある。これらの数字を見る限り、皆韻字は南北朝時代において、中舌的母音と通韻するものが圧倒的に優勢であり、皆韻字と佳韻字が通韻する用例が少なく、これがまた後世の唐の音韻事情とは異なっている点などを総合的に配慮すると、皆韻字は中舌的母音であったと判断できるだろう。

また皆韻字は之音/ə/との通韻事項からも中舌的音価を垣間見ることができる。陶淵明の詩歌『乞食』を取り上げる。『乞食』では之韻/ə/の「之・辞・詩・胎」と灰韻/ɐ/の「来・杯」が通韻している。以下その音価である。

表 9

韻脚	先秦	南北朝	韻目
之	ə	iə	之韻
辞	ə	iə	之韻
来	ə	ɐi	灰韻
杯	uəi	uɐi	灰韻
詩	iə	iə	之韻
才	ə	ɐi	灰韻
胎	iə	iə	之韻

王力の『漢語音韻史』と小川環樹の『陶淵明』による

ここからも皆韻の母音の性格が察知できると考えられる。佳韻の場合は、支韻と通韻するが、之韻と韻を踏むことは殆どない。それに対して皆韻は支韻と通韻することはごく稀で、之韻と通韻している用例は、謝靈運と謝惠連の詩歌に 14 例も見られる。これは佳韻と皆韻が万葉仮名の工列音においてそれぞれ甲類と乙類で顕現する最も重要な原因である。

また皆韻字と同じく灰部/ɛ/の哈韻字の「臺・迺・耐・苔(ト・ド)」と「乃迺(ノ)」がオ列乙類に属していること、之韻/ə/の「己・其・期・暮(コ・ゴ)」「止(ト)」と「己(ヨ)」「里(ロ)」がオ列乙類に属していることから間接的に裏付けられよう。それに魚韻/ɔ/字がエ列乙類とオ列甲類に現れることも注目されるべきであろう。

### 三、佳韻字と皆韻字の主母音「ア」

二項のところで述べたように、日本呉音の佳韻字と皆韻字の「エ」音読みは、その古層の呉音体系である万葉仮名表記のなかで中国南北朝時代の音価がリアリスティックに投影されていることがわかる。それでは一般説では、ア音はエ音に比べて新しい音に捉えがちなが、実際問題として佳韻字と皆韻字のア音がいつごろからエ音と並存したかという問題に触れ、また解明を試みなければならないことになる。故に以下この問題について検討してみたい。

#### (一) 佳韻字の主母音「ア」

佳韻字が先秦の/e/から南北朝の/eai/への変化過程を通じて、その主母音が/a/に定着するようになったが、通説ではその定着の時期は唐の時代とされている。根拠としてはまず李白の詩歌『千裏思』『古意』と杜甫の詩歌『喜晴』『江畔独歩尋花第三首』における佳韻字と歌部麻韻/a/字の押韻事情が取り上げられている。以下の通りである<sup>17)</sup>。

李白『千裏思』 押韻：沙家花嗟涯  
『古意』 押韻：花斜家涯  
杜甫『喜晴』 押韻：佳華花涯蛇賒家麻瓜沙斜嗟  
『江畔独歩』押韻：家花生涯

もう一つは上記の韻文の事項以外に『五経文字』等において佳韻字と麻韻字の反切が互いに混用していることが根拠として取り上げられている。

それでは南北朝時代に佳韻字と歌部韻字が押韻する用例があったかどうかということは、佳韻字の「エ」「ア」両音を正確に捉えるポイントになる。佳韻字が歌部と押韻する用例は晋の詩人庾信の作品に見られる。『敏驥賦』の韻脚は「多・知・崖・馳」<sup>18)</sup>である。その中で「多」は歌部韻字で、「知・馳」は支韻字である。「崖」は特別で佳韻・支韻両方に属する。そこで、それぞれ異なる主母音をもつものが通韻する条件としては、どちらかの字にもう一つの音があったか、もしくは音韻変化の影響で両方の音が近似していたかということが考えられる。

「崖・涯」の場合、『広韻』に二種類の音が記されている。一つは「魚羈切」で支韻字であり、もう一つは「五佳切」で佳韻字である。「差」も一字多読であって、『広韻』には「楚宜切(支韻)」「楚佳切(佳韻)」「楚皆切(皆韻)」「初牙切(麻韻)」「胡卦切(卦韻)」等合計五種類もある。

『広韻』の時代性から考えて「差」が南北朝時代にも五種類の音があったかどうかは判断できないが、先秦時代の韻部に対する先学たちの分析から、南北朝時代にも「差」に歌部麻韻字の音と佳韻字の音があったことが分かる。

『敏驥賦』においては一見「多」と「崖」が韻を踏み、「知」と「馳」が韻を踏みあう「交韻」型として見るならば、決着がつきそうであるが、そうすると、佳韻の「崖」は南北朝時代にすでに主母音/a/の音があったと判断できる。これ以外にも佳韻と歌部韻の通韻と見られる例はかなりある。以下その実例である<sup>19)</sup>。

イ、夏侯湛（晋）	『觀飛鳥賦』	押韻：儀差崖垂危
ロ、張載（晋）	『洪池波銘』	押韻：池涯畦差訾
ハ、欧阳建（晋）	『登櫓賦』	押韻：垂崖差疲
ニ、嵇康（晋）	『贈秀才入軍十九』	押韻：崖儀池虧窺施羈離波危巖奇隨
ホ、范泰（宋）	『高鳳讚』	押韻：義差奇馳為崖疵羈
ヘ、顔延之（宋）	『赭白馬賦』	押韻：儀街螭奇羈馳枝離
	『皇太子積奠』	押韻：儀街馳猗
ト、鮑照（宋）	『園葵賦』	押韻：委灑靡解
チ、江淹（梁）	『空青賦』	押韻：施娃離儀虧
リ、王僧孺（梁）	『詠寵姬』	押韻：罷屣解買
ヌ、任昉（梁）	『王貴嬪哀策文』	押韻：家虵紗佳
	『侍釋奠宴』	押韻：多家華

佳韻字と歌部韻字の関係について、王力は支・佳韻と歌・戈・麻と音は近く、南北朝時代に見られるこのような現象は先秦時代と似ていることを指摘している。

そこで日本の呉音体系の中で状況を見ると、佳韻字に「エ」音字（賣・解・懈・畫）と「ア」音字（鞋・崖）があるのに対して、歌部にも「エ」音字（馬・家・牙・下）と「ア」音字（麻・叔・芭・琶・茶・窠）見られる。このような事情を踏まえた上で判断するならば、佳韻字にも古くから二種類の音があった蓋然性は高いと言えよう。それは中国の韻文資料と日本呉音における分布をみると、南北朝の佳韻字の音として「エ」音の方が優勢であった可能性は認められるものの、必ずしも「ア」の方が新しい音だとは言い切れないような感じがする。一つ付け加えておこなれば、万葉仮名にア列音に佳韻字が現れなかった理由としては、歌部の単純な母音が日本語表記に相応しく、佳韻字には韻尾があったことなどが考えられよう。

## （二）皆韻字の主母音「ア」

皆韻字は唐の時代に佳韻字と区別が消えつづけていたことは、『經典釈文』の反切例や当時の

詩歌の韻脚における皆韻字と佳韻字の混用から明らかにされている。このような原音の音韻変化がやがて日本字音に直接反映されるのは中国唐の長安音を母胎とした漢音の中に現れてくるのは周知の通りである。日本呉音で主母音「エ」であった皆韻字の「壞・懷」が漢音ではその主母音がいずれも「ア」としてあらわれ、佳韻字と同様の変化が見られる。

したがって、皆韻字を検討するに当り、呉音皆韻字のなかで「ア」と写された/a/は、南北朝時代に実在したのであろうか、また/e/と/a/の両立が認め得ることならば、それはいかなる関係であったか、等の問題解明が要請される。

早くも『楚辞』に中古の皆韻韻字と同じ灰部に属する灰韻字が歌部韻字と押韻する例が見られる。以下の通りである。

『楚辞』 押韻：蛇飛徊

『楚辞』 押韻：毀弛

『楚辞』とは戦国時代末の楚の屈原及びその後継者たちの詩歌を集めたもので、二世紀ごろに成立されたものとされている。楚は中国の春秋戦国時代揚子江中流及び以南を制したという国であった。呉音の場合、「呉楚之音」という異称が取り上げられることも稀ではない。故に揚子江流域で既に遙か春秋戦国時代から歌部と微部の通韻例があったこと自体は、南北朝における皆韻と歌韻の押韻事情に関して示唆する内容が大きいものであると認めざるを得ないだろう。即ち日本呉音に見られる皆韻字が「ア」と「エ」に読まれた音韻の根拠たるものは、中国の原音の事情としては、少なくとも二世紀ごろに既にその兆しを見せていたとしても、過言ではないだろう。

漢魏晋南北朝時代の詩歌における皆韻（同じ部の灰韻字も含む）と歌韻との押韻例が見られる<sup>20</sup>。

- イ、司馬相如（漢）『大人賦』押韻：馳離魅河沙
- ロ、楊雄（漢）『廓』押韻：開階差
- ハ、徐淑（漢）『答秦嘉』押韻：帰差違師懷徊暉乖追衣
- ニ、楊泉（晋）『賛善賦』押韻：施階危虧差知為規
- ホ、左思（晋）『魏都賦』押韻：陂規崑垂差施離披池
- ヘ、謝惠連（宋）『鞠行歌』押韻：騎姿知貲離隤疲吹危差垂

皆韻字に限って言うならば、まずここで晋宋の韻脚事項に頼って、魏晋南北朝の皆韻字が現代呉方言の場合と同じく一字両読のものであったとにわかに断言できない要素が含まれていることは、あらかじめ断っておきたい。皆韻字は佳韻字の場合とはやや状況が異なる。一つは佳韻字の場合と比べて、皆韻字の方が歌韻字と通韻する例は量的にはやや少ないほうである。も

う一つは『広韻』の中で「差」の反切には皆韻字の音も記録されていることである。ただし、前述の楚辞に見られる歌部と微部の通韻例、佳韻字と歌部の通韻事情、また現代呉方言の音韻分布を総合的に配慮して考えると、南北朝時代の皆韻字は佳韻字の場合と同様、歌韻に近いもう一つの音を持っていた可能性は十分あり得ることであって、その可能性には揺るがし難い内容が包含されていると考えられよう。

#### 四、終わりに

本論では、日本呉音の佳韻字・皆韻字の中で二種類の読みが存する現象について、日本呉音と中国南北朝の音韻実態及び中国呉方言の音韻的対応関係からその規則たるものを検討してきた。現代呉方言の佳韻字・皆韻字に二種類の音が現れてくるのは、歴史的には古代語の影響による文語と口語と繋がるものであって、現代の呉方言地域でも常に見られる現象であることは、明らかである。また南北朝時代の言語事情を知る上で最も確実な根拠となる詩歌の韻脚の事情からも、当時呉地方の音韻状況が窺える。日本呉音は古代呉方言のかような音韻実態が伝承され、定着したにちがいない。

南北朝の韻脚から見ると、当時佳韻・皆韻の「工」は優勢の音であったと判断できる。だが、それぞれの部分的字が歌部の字と押韻したこと、またその発端を成すものが先秦時代にまで遡れること等からみて、「工」と「ア」の勢力の違い、量的差は明らかに存するものの、日本呉音と呉方言に見られる佳韻・皆韻の一字両読の現象は、南北朝時代の音韻実態と繋がっていることは十分考えられるのではあるまいか。

南北朝の音韻実態と日本呉音の音韻的対応関係、また古代呉方言と現代呉方言の関係等を考える際、南北朝の韻文史料は最も重要な資料となることは既に先学の指摘している通りである<sup>21)</sup>。『広韻』『韻鏡』だけによった古代呉方言と日本呉音の関係解明には、突き止めきれないところが多いが、南北朝の韻文資料の場合は、時的要因と方処的要因を追求する上で、貴重でより確実な根拠を提供してくれる。

本論が佳韻・皆韻字の「工」音に重きを置いたのは、現段階での一般説において「工」を古い音であるとしておきながらも、それが南北朝時代の音として捉えられるかどうか、またそれが「ア」音とはどのような関係を持っていたか、更にそれが日本呉音の形成に影響を与えた南北朝の音としていかなる性質を帯びたものであったかについて、深く追求していなかった点に対して強く意識していたからである。

本論では日本呉音における佳韻・皆韻の二様の主母音が中国南北朝の音韻体系と相対応しているかどうかを解明しようとする立場を終極的目標とした。方法としては、現代呉方言の音韻実態及び中国南北朝の詩歌に見る音韻体系とをつきあわせて考える視点を貫くことにつとめた。検討の結果、中国の南北朝時代において佳韻・皆韻字共に二種類の主母音が存在した蓋然性が



高いことが明らかになった。それは佳韻・皆韻系列の中である一部分の字がいち早く/e/から/a/へと移り変わったこと等を背景としているものと思われる。

本題がより徹底的に検証されるためには、呉方言以外の方言事情、また南北朝期の北方言語音の事情も検討の対象とすべきであると考えられるが、これら残された問題は、今後の課題としておきたい。

<注> (拙論で出所を明記した著書と論文は除く)

- 1) 大橋勝男は、日本呉音と中国呉方言の比較研究の必要性を度重ねて指摘している。同時に沼本克明も『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(武蔵野書院、1982年)の中で中国現代方言の研究とつきあわせていく方法論の有効性について指摘している。日本呉音の中には謎に包まれた問題点が多いが、原音の方言音実態と古代韻文資料に見る南北朝時代の音韻体系に対する厳密な検討なしには、日本呉音の複雑さの謎は、深まる一方であると思われる。  
最近の中国側の研究として注目すべきものに張光宇の「呉語在歴史的拡散運動」(『中国語文』1994年第6)、「漢語方言発展的不平衡性」(『中国語文』1991年第6期)がある。張光宇は中国呉方言等の分析において、日本呉音を視野に入れているが、示唆に富んでいる内容が見られる。逆に日本呉音の検討の際、中国呉方言の研究成果も貴重な証拠を提供してくれると考えられる。
- 2) 山田孝雄は直接交流説を取り、橋本進吉は朝鮮半島経由説を唱えている。
- 3) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院、1982年、28頁参照。
- 4) 注3引用書、560頁参照。
- 5) 張光宇「呉語在歴史的拡散運動」(『中国語文』1994年第6期)参照。
- 6) 正宗敦夫『万葉集総索引』平凡社、1974年  
高木市之助・富山民蔵『古事記総索引』平凡社、1974年、参照。
- 7) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院、1982年  
藤堂明保「呉音と漢音」『藤堂明保中国語学論集』汲古書院、1987年、参照。
- 8) 王力『漢語史稿』中華書局、1980年、152頁参照。
- 9) 王力『漢語音韻史』中国社会科学出版社、1985年、卷上第一章・第三章参照。
- 10) 丁仲祐編『全漢三国晋南北朝詩』台湾芸文印書館印行、1984年、(二)全梁詩卷六、1313頁参照。  
王力「南北朝詩人用韻考」(『清華學報』1936年、11-3)・(二)支佳歌戈麻魚虞模)参照。
- 11) 于安瀾『漢魏六朝韻譜』汲古書院、1936年、244-248頁参照。
- 12) 頼惟勤『中国音韻論集』汲古書院、1989年、273頁参照。
- 13) 注6引用書。
- 14) 注7引用書。
- 15) 注4引用書。
- 16) 注9引用書。
- 17) 『邵榮芬音韻学論集』首都師範大学出版社、1997年、313頁参照。
- 18) 注11引用書。
- 19) 于安瀾『漢魏六朝韻譜』汲古書院、1936年  
王力「南北朝詩人用韻考」『清華學報』、1936年、11-3
- 20) 注19引用書・論文。
- 21) 王力は「南北朝詩人用韻考」(1936)にて「(韻書以外の場合)資料の中で最も重要なのは南北朝の韻文である。なぜならば、韻文は韻書と直接繋がるものだからである。仮に『広韻』『韻鏡』が逸したとしても、南北朝の韻文に基づいて一冊の韻書が書き上げられる」と述べている。中古の韻書と韻図だけにたよる研究は突き止められないものが多く、南北朝時代の韻文資料が純粋度の高さからみて最も有効な資料ではないかと考えられる。

<参考文献> (拙論の中で出所を明記したものは除く)

1. 有坂秀世(1955)『上代音韻考』三省堂
2. 有坂秀世(1957)『国語音韻史の研究』三省堂

日本呉音と呉方言の音韻的対応関係(全)

3. 藤井茂利(1996)『古代日本語の表記法研究』近代文芸社
4. 大橋勝男(1974-76)『関東地方域方言事象分布地図』桜楓社
5. 山田孝雄(1940)『国語のなかに於ける漢語の研究』宝文館出版
6. 沼本克明(1986)『日本漢字音の歴史』東京堂
7. 馬瀬良雄(1964)『方言意識と方言区画』(『日本の方言区画』東京堂・1964)
8. 奥村三雄(1990)『方言国語史研究』東京堂出版
9. 迫野虔徳(1998)『文献方言史研究』清文堂
10. 高松政雄(1986)『日本漢字音概論』風間書房
11. 高松政雄(1993)『日本漢字音論考』風間書房
12. 藤堂明保(1980)『中国語音韻論』光生館
13. 森博達(1991)『古代の音韻と日本書紀の成立』大修館書店
14. 王力(1986)『王力文集』第6巻山東教育出版社
15. 王力(1958)『漢語詩律学』新知識出版社
16. 馬淵和夫(1971)『国語音韻論』笠間書院刊
17. 服部四郎(1959)『日本語の系統』岩波文庫
18. 王洪等(1991)『古詩百科大辞典』光明日報出版社
19. 内山精也・鎌田出・山本誠司編(1984)『先秦漢魏南北朝詩作者索引』東方書店
20. 徐志剛編(1992)『詩詞韻律』濟南出版
21. 袁家驊(2001)(『漢語方言概要』語文出版社
22. 内田泉之助編(1964)『古詩源』上 集英社
23. 星川清孝編(1964)『古詩源』下 集英社
24. 余迺永編(1993)『新互注宋本広韻』香港・中文大学出版社
25. 藤堂明保・小林博共著(1970)『音注韻鏡校本』木耳社版
26. 坂本幸男・岩本裕訳注(1967)『法華經』上・下岩波書店